



# 近世淡路の棒役負担について

高橋 啓

## はじめに

近世の農民夫役は、年貢とともに農民が領主に対して負担するいわゆる百姓役の基軸部分をなすものであり、これまでも例えば夫役を労働地代として捉えうるかどうかといったその本質規定や性格をめぐる問題を中心に多くの論議が重ねられてきた。<sup>(1)</sup> また、近年は周知のように役と諸身分との対応関係に注目する研究動向がさかんであり、そうした機運は夫役研究の分野にも直接・間接に大きな影響を与えつつあると思われる。<sup>(2)</sup>

ところで、かつて私は阿波を素材にして農民夫役を含む諸割賦について検討したことがあるが、<sup>(3)</sup> そのねらいの一つは、個別藩領における社会構造やその編成のあり方を農民の負担する諸割賦を介して、それに即して検討できないかという点にあった。前稿ではその意図を十分に果たすことができなかったが、それは一つには夫役なり諸割賦なりに関する実態分析が量的に不足していたことにも起因するものであった。そこで、本稿では徳島藩における夫役研究をさらに深めていくための準備作業として、従来あまり検討されることのなかった淡路の夫役（棒役）を取り上げ、<sup>(4)</sup> それがいかにか編成され展開していったか、その実態について若干の検討を加えてみたい。

## 一、

元和元年（一六一五）五月、徳島藩主・蜂須賀至鎮は先の大坂の陣の軍功によって、將軍家光から淡路一国を加封された。翌月、淡路に渡海した至鎮は島内を巡見、ただちに「淡州御政事方」奉行に篠山加兵衛と岩田七左衛門を任じ、その経営に着手した。本稿の主題に関わって見れば、同年十月、至鎮は篠山加兵衛宛に「覚」十五条を出し、由良城内に城米一万石を確保すること、淡路国内で飼馬用の「ぬか・わら」を調達すること、「国中人足」の動員体制を調えること、地下中に井普請を申し付けることなど、夫役およびそれにとまう諸役の編成と動員方について指示を与えている。<sup>(5)</sup> また、寛永四年（一六二七）には、淡路支配の基礎作業として「淡州惣御検地」が始められた。この検地は、「在々庄屋政所」から暫紙を取り付けたうえで実施されたが、検地にあたっては田畑品位を九等級に定めるなど、<sup>(6)</sup> すでに実施された阿波本国での総検地を基準とするものであった。

ところで、淡路ではこの年、検地と並行して国内最初の棟付改めとそれにもとづく夫役人数調査が行なわれている。当時、淡路では元和八年（一六二二）からの「大坂城御普請御手伝」、さらに寛永十一年（一六三四）から始まった「淡州由良御城須本へ被移御普請」<sup>(7)</sup> 洲本築城普請や島内の井水方普請、とりわけ溜め池灌漑の整備など、多数の現夫徴発を必要とする各種普請があいつぐ状況下にあった。そうしたなかで、元和九年には「普請人足」の調査とその確保が指示され、百姓五人に一人宛の人足徴発が通達されており、また、寛永九年（一六三三）にも「在々相廻刻送迎之人馬并ざうし薪ぬかわら申付候事」と夫役・諸懸物の調達が命じられている。<sup>(8)</sup> 寛永四年の棟付改めとそれにとまう夫役人数の把握は、直接にはこうした状況に対応するものであったと考えられる。以下、この時期の夫役負担について若干検討しておきたい。

淡路では、夫役のことを一般には棒役と呼んでいたが、「夫役は：棒一本に五人掛りと定め、村中有人十五才より六十才迄、其業可相勉を選出す」とあるように、阿波国と同様に十五才〜六十才までの男子に夫役を賦課していた。<sup>9)</sup> その場合、夫負百姓一人が負担する夫役を「二分（歩）役」と称し、五人分でもって「棒一本」（本役または一人役）としていた。淡路には、寛永四年（一六二七）に作成された棟付帳がいくつか残されているが、参考のために「寛永四年、淡路津名郡志筑王子村棟数夫役御定帳」の一部分をあげておこう。<sup>10)</sup>

志筑之内王子村

.....

一、壹家	式分役	歳四十四	二郎三郎
一、壹家	本役	同四十三	右衛門五郎
	右之下人	同十二	二郎
	同弟	同一	十郎
一、壹家	同下人	同二	平十郎
一、壹家	五分役	同七	惣三郎
	右之下人	同十四	まこ
一、壹家	三分役	同五	久三郎

（中略）

棟数合四拾四間

内

三家ハ 本役 四家ハ 四分役

貳家ハ 九分役 六家ハ 三分役

壹家ハ 八分役 貳家ハ 三分役

壹家ハ 七分役 壹家ハ 壹分役

壹家ハ 六分役 五家ハ 親下人共

五家ハ 五分役

家数合三拾壹家

夫役合拾三人三分

頭数合五拾七人 内四拾壹人ハ六十<sup>五</sup>十五迄

壹家ハ 庄屋 壹家ハ 竹木下見

壹家ハ 行 壹家ハ 間人

壹家ハ 桶屋 壹家ハ 寺

四家ハ 大工 貳家ハ 親下人共

壹家ハ 御奉公人

家数合拾三家

人数合貳拾四人家持子共下人共ニ 内拾六人ハ六十<sup>五</sup>十五迄

右人数惣合八拾壹人

御入薪貳百六拾六束 但八木にシテ壹束ニ付納升壹升宛 夫役壹人ニ付竹貳拾束宛

帳面には、一〇才〜六五才迄の男子が各家別に負担すべき夫役数とともに登録されており、この帳簿作成の主要な意図が、村々の夫役徴発高の算定と各家毎に夫役を徴発しうる人数を把握することにあつたことは明らかである。同村では、村内四四戸のうち村役人（親下人共）・諸職人・奉公人・寺院・間人を除く三一戸の者が夫役負担農民Ⅱ役家として把握されていた。夫役賦課はいわゆる棟役として「イエ」に掛かつていたが、彼らはその負担能力に応じて、それぞれ本役Ⅰ一分役の夫役を負担していた。その場合、本役を負担した右衛門五郎家の例でもわかるように、家持下人や分家（隠居・兄弟など）は本家の負担する夫役数の中に一括して算定されるのが普通であり、後に壱家―小家関係として制度化される村内の同族团的結合を受皿として夫役が賦課されていた。なお、夫役に付随する懸物として「御入薪」が一人役Ⅱ二〇束の割合で徴収されているが、すでに代米納化されていたことがわかる。

ところで、阿波国でも淡路に少し遅れて、寛永一一年（一六三四）に棟付改めが実施され、夫役人数調査が行なわれている。一例として「寛永拾壹年、坂東郡之内東中富村御役人帳」の一部分を示しておく。<sup>(1)</sup>

一、六歩 本百姓 又三郎

一、二歩 右之弟 彦三郎

一、二歩 右之下人 松千代

合一人

一、六歩 本百姓 庄三郎

一、二歩 右之下人 新吉

合八歩

一、六歩 本百姓 源次郎

一、二歩 右之弟 天ま

一、二歩 右之おい 仁蔵

合一人

(中略)

一、三歩 間人 彦五郎

右之役合二十三入六歩 百姓分

外二六歩役ハ 政所分

二口合二十四人二歩

寛永十一年戌正月吉日

森佐太右衛門(花押)

増田 主殿助(花押)

これによると、寛永期の阿波では、本百姓六歩、間人三歩、下人および本百姓の分家が各二歩という割合で夫役が賦課されており、①本百姓・間人・下人といった身居(みずわり)村内での身分階層的関係)を基準にして負担すべき夫役数が規定されていること、②淡路では免除されていた間人百姓にも夫役負担が要求されていたことなど、その限りではより整序された賦課体系を調えていたことがわかる。しかし、その賦課は先に見た淡路と同様、本百姓を中心とする同族团的結合(株内)を単位にしてなされており、藩の夫役徴発体系がその上に基礎を置いていたことは注目される。なお、帳面には各家の筆頭者のみが登録されており、したがって、ここに登場する間人・下人や本百姓の分家筋も帳面上では各本百姓に包摂されているが、実際には独自の居屋敷と家族を持ち一定の自立的経営を維持していたものと考えられる。間人三歩、下人二歩といった夫役賦課は、棟役として存在していたことがわかる。

## 二、

ここで多少前後するが、淡路の棒役負担を検討する前に、近世前期の徳島藩の夫役について若干付言しておきたい。徳島藩の夫役は、大島真理夫氏も指摘されるように<sup>(12)</sup>、大別して①陣夫役と②平時における普請役その他の諸役より成っていた。そのうち、①は、主として給人の知行地付百姓の中から選定された「奉公人」(先規奉公人)<sup>(13)</sup>によって負担されたが、一方、勸農普請役を中心とする②は、①を除く領内農民に対して賦課されていた。徳島藩では、これらの夫役を調査・確保するためたびたび「人定」<sup>(14)</sup>＝棟付改めを実施したが、明暦期に至って阿波国一円に統一的な棟付改めが行なわれた。明暦棟付改めは、この時期の小農経営の展開を軸とする農村のあらたな局面をふまえながら、基本的には村落支配の編成・強化をねらったものであるが、<sup>(15)</sup>そのため各農民の身居や動向、夫役負担能力の有無、保有石高・牛馬数などを克明に把握した。

徳島藩では、この明暦棟付改めを画期として、②を中心とする夫役制度に大きな改編が加えられた。すなわち、明暦三年(一六五七)に領内の棟付改めに先立って、七ヶ条から成る通達が郡奉行に対して出されている。<sup>(16)</sup>それは「百姓役」(夫役)を確保するために、村内における夫役負担関係の基準を設定したものであるが、とくに第一条目の「一、本百姓間人名子下人頭耆人ニ付式歩宛ニ相定事」という規定が注目される。ここでは、本百姓・間人・下人といった村内での身居に関係なく、頭役として一人あたり均等に二歩宛の夫役を徴発することがあらたに規定されている。従来の棟別賦課という原則に代わって、その賦課基準を棟別から頭割りに移行しようというものであり、この頭役としての二歩役負担は以後徳島藩の夫役体系の基準となった。ちょうどこの時期は、幕藩制的秩序が確定されるにともない農民夫役に占める①陣夫役の比重が相対的に低下した時期であり、一方、寛永―明暦期を中心に新たな農政

が展開するなかで、用水普請・川除など一連の勸農普請が藩の主導下で積極的に推進され、農民夫役がそのなかに編成されていった過程でもあった。<sup>(16)</sup> 棟役から頭役への移行は、基本的にはそうした状況のなかで、農民労働力の組織的かつ恒常的な確保をめざした夫役に対する領主的再編と見ることができよう。

明暦棟付改めは夫役の頭役への移行という問題だけでなく、村請制支配という側面においても重要な意味をもっていた。この棟付改めによって、藩は村落内部の本家筋を中心として、それとんんらかの血縁関係にある分家、および非血縁の名子・下人などの従属的な小百姓を包摂する同族团的グループをいわゆる沓家——小家に制度化し、村落支配の単位とした。<sup>(17)</sup> 大島氏は夫役徴収体制と沓家——小家制度の関連に注目し、「一人当たり二分役という人頭別の負担体制において、なお沓家——小家という棟別賦課体制の名残りのような制度が施かれた理由はいまだ十分に明らかにされていない。」と疑問を呈されたが、<sup>(18)</sup> 明暦期に頭役に移行した夫役も大島氏がイメージされたように個々の百姓から徴収されたのではなく、実際には沓家——小家を単位として村請けで処理されていたのである。たとえば、延宝二年（一六七四）の板野郡東中富村についてみれば、<sup>(19)</sup> 同村では庄屋・行キなど夫役免除者を除く一五才〜六〇才迄の一八九人に二歩役が課され、合計三七人八歩の夫役が村に対して要求されている。そのうち、沓家本百姓兵右衛門グループを抽出すれば、同グループは小家（第）一軒・小家下人二軒、男子人数二一人（内夫負人は七人）で構成されていたが、七人分の夫役は「合一人四歩」と一括して同グループに付けられている。おそらく、この七人分＝一人四歩の夫役は沓家筆頭人の兵右衛門をとおして一括処理（賦課・徴収）されたものと考えられる。

ちなみに、こうした村請制下の基礎に沓家——小家関係を編成していく方式は、夫役だけでなく年貢収取の場においても機能していた。寛文十一年（一六七二）の東中富村の秋年貢割賦帳には、仁左衛門以下四三人の者が年貢負担人として登録されている。これを同七年の家数改帳と照合すると、たとえば（A）（B）に示されるように、年貢負

担人は老家筆頭人に限られていることがわかる。<sup>(20)</sup>

(A) 寛文一二年、秋年貢割賦帳

高拾六石壹斗七升貳合五勺

一、米三石九斗六升五合五勺

仁左衛門

内五斗三升九合七勺

大ッ六斗八升

同七斗四合九勺

こま五斗三升

(下略)

高七〇石四斗七升貳合三勺

一、米貳拾貳石貳斗九升五合

弥左衛門

内貳石三斗貳升五合五勺

大ッ貳石九斗三升

同三石五升九合

こま貳石三斗(下略)

(B) 寛文七年、人数家数改帳

一、老家

本百姓

仁左衛門

歳三拾九

(家族は省略、以下同じ)

小家

仁左衛門弟

宇兵衛

同三拾七

小家

仁左衛門いとこ与次兵衛

同五拾五

一、老家

本百姓

弥左衛門

歳三拾四

小家

弥左衛門弟

利左衛門

同貳拾五

近世淡路の棒役負担について(高橋)

小家	弥左衛門下人	市助	同三拾六
小家	弥左衛門いとこ治兵衛		同三拾四
小家	治兵衛下人	清三郎	同式拾八
小家	弥左衛門いとこ伝兵衛		同三拾一

この場合、(B)の惣家本百姓弥左衛門の従兄弟である小家治兵衛が自分名義の小家下人を抱えていることから判明するように、小家(小家下人)のかなりの部分は一定の自立的な経営体として実際には存在していたと考えられる。したがって、彼ら小家も応分の年貢を負担していた筈であるが、公式の割賦帳では惣家筆頭人がグループ内の小家・小家下人分の年貢をも含め一括して年貢負担人として把握されている。以上のように、藩は村落支配の単位として村落内部の同族団体的小共同体を惣家—小家に編成し、少なくとも明暦—延宝段階ではそれらに依拠しながら年貢・夫役の収取をも実現させていたといえよう。

ところで、明暦期の二歩役移行と関連して、それに継起するものとして夫役代銀納の問題があった。寛文四年(一六六四)、藩は「在々」からの要求を容れる形で夫役の代銀納を認める以下のような判断を示している。<sup>(21)</sup>

百姓役銀子ニ仕上書物之事

一、かんのうの御普請之事

一、新田御普請之事

一、薪伐之事

一、葭萱蒔之事

一、御材木伐之事

一、竹之事 但竹材ニハ飯米不被下候事 竹送ハ御赦免被為成候事

一、諸事御奉行被仰付御扶持方被下御普請之事

右之通御役御赦免被成被下候ハ、百姓夫役懸人役ニ付年中式拾五匁宛ニ御請可仕候間、銀子請ニ被仰付被下候様ニ被仰上可被下候、銀子指上申儀夏秋両度ニ半分宛指上可申候

右七ヶ條之外之御役有来通可仕旨、寛文四年霜月廿八日在々々願出ニ付願之通被仰付候

夫役一人役につき銀二三匁（二歩役Ⅱ五匁）の割合で代銀納を許可するというものである。ただ、この措置によって「百姓役」としての平時における普請役その他がすべて代銀納化されたのではなく、文面でも明らかに、そのうち「かんのうの御普請」以下の七項目に関する現夫負担が代銀納に移行したということである。これらの諸役は、別の記録に「寛文四年以前百姓共足仕候節、於御作事所老人年中廿日役と相極召使候」とあるように、従来は「廿日役」とも呼ばれ、作事奉行の管轄下にあつて勸農普請を中心に年間二〇日間を基準にして夫役を勤めるものであつた。阿波では、これ以外にも①藩主の参勤・鷹狩・出郷その他の「公儀御用」、②諸役所・城中への諸役・懸物、③往還道・橋・堤防工事などの諸普請人足、④伝馬役人足、⑤諸役人奉行の出郷御用人足など多様な諸役が存在していたが、それらは夫役（二歩役）負担体系とは別に以後、主として郡中諸割賦という独自の負担体系に公的に編成されていった。<sup>(23)</sup>

さて、代銀納化された二歩役では、とくに勸農普請関係が注目されるが、先述したように、この時期は藩による積極的な勸農政策が進められていた時期であり、その環として農民労働力を組織的に勸農普請その他に投入する体制がととのえられつつあつた。明暦棟付改めを画期に夫役が棟割↓頭割負担に改編されたのもその方向に沿うものであつたし、寛文四年の二歩役の代銀納化も基本的にはそれに連動するものであつたと考えられる。このように、夫役代銀納はこの時期の領国経営のなから導きだされたものであるが、同時にそれは領内農民の意向をふまえたものであつ

た。代銀納実施に先立って、藩は村々の意見を徴しているが、寛文二年（一六六二）、坂東郡東中富村では庄屋九郎左衛門が村内の三傍示（敷地・中通・南分）ごとに農民の意向を調査している。この時、たとえば敷地傍示からは次のような上申がなされている。<sup>(24)</sup>

.....

一、高拾八石八斗五升七合

夫役四歩

百姓

安右衛門

一、同四拾一石八斗九升七合

夫役四歩

庄屋九郎左衛門

八郎兵衛

右高合四百七拾九石六斗一升四合四勺

右夫役合十九人八歩

右ハ唯今之通御殿役仕勝手ニ候哉、銀子請ニ仕勝手ニ候哉、銀子請ニ望申候ハ、高懸ニ成共、夫役懸ニ成共望次第二申上候へと御尋被為成候、銀子請勝手ニ奉存候、相応ニ被為仰付候ハ、御請可仕候、然上ハ私共夫役懸ニ被仰付被下候様ニと奉存候、則面々夫役并扣高書付指上ケ候

以上

東中富村五人組

市郎兵衛

太左衛門

（以下、一一人略）

寛文二年九月十五日

武市与兵衛 殿

文面によると、藩の意図は代銀納化を前提にして、「高懸」「夫役懸」のいずれを基準にして代銀納に移行すべきかを質することにあつたようであるが、農民たちは従来の「御殿役」＝現夫負担にかわって「銀子請」を強く要求す

るとともに、「夫役懸」(二歩役、頭割)による代銀納の実施を求めている。この場合、文書に名を連ねている市郎兵衛以下一三人の者は、いずれも先述した沓家筆頭人たちであり、グループ内の小家(下人)など小百姓に対して一定の家父長的支配関係を保持していたと思われる。寛文期の二歩役代銀納は、彼ら沓家筆頭人の意向をふまえたものであり、そうした沓家——小家関係を基礎にして実現されたといえる。ただ、その際、東中富村庄屋の九郎左衛門が村の総意として提出した報告では、「…当村百姓中不残相尋申し候へハ、相応ニ銀子請ニ被仰付被下候へハ百姓共勝手ニ奉存候と申候、然共百姓共之内ニ高懸望申者と夫役懸申者と二旦ニ御座候ニ付、帳面仕指上ケ申候」と代銀納という基本点では村の意志集約ができたものの、その賦課基準として「夫懸」でなく「高懸」(高割、地役割)を要求する者が一方では存在したことを伝えている。<sup>25</sup>当時、小農経営の基礎を確定しつつあった小百姓層のなかには、夫役負担の均等化を実現させる方向として石高負担を要求する動きが伏在していたと考えられる。

以上、一七世紀中後期の徳島藩における夫役負担の動向について検討したが、そうしたなかで淡路の夫役(棒役)負担はどのように展開したのであろうか。以下、節をかえて考察してみたい。

### 三、

寛文一二年(一六七二)、仕置家老山田豊前は参府中の同役賀嶋主水に書を送り、阿淡両国において早急に棟付改めを施行する必要があることを指摘し、淡路に関しても藩主綱通の意をうけて、「淡路国之事…棟付寛永四年、加子役慶安三年被仰付候、尚以久敷事候条御改被仰付候様ニ仕度候…御両国とも棟付并加子役改可被仰付候条、被得其意、淡州之儀九郎兵衛へ御手前可被申遣御意候」と申し送っている。<sup>26</sup>淡路では、先の明暦棟付改めは施行されておらず、寛永期に夫役人数調査のための棟付改めが実施されて以来、すでに四〇年以上が経過していた。ちょうど寛文八

年に、筆頭家老稲田氏が「淡州御仕置御用」(洲本仕置職)<sup>(27)</sup>に任じられ、それにもなつて郡奉行以下の地方支配機構も整備されるなど、ようやく淡路経営が軌道にのつた時期にあたる。なお、ここで付言するならば、淡路の領国経営はこれまで見てきたように徳島藩(阿波)の基調に沿うものであったが、その具体的な領国経営のあり方については淡路の実態をふまえながら、洲本仕置職を中心とする洲本府の独自の判断にかなりの部分がゆだねられていたと思われる。この時の棟付改めについても、仕置家老山田豊前と洲本仕置職稲田九郎兵衛との再三の折衝の末、最終的には稲田氏の意向と判断によって実行に移されたものであった<sup>(28)</sup>。また、後述する棒役の代銀納への移行や、それにもなう負担のあり方についても同様である。

さて、淡路では翌延宝元年(一六七三)に一齐に棟付改めが行なわれ、それにもとづいて村ごとに棟付帳と夫役帳が作成された。ここでは、三原郡湊里村の一部分を例示しておく<sup>(29)</sup>。

## (A) 延宝元年棟付帳

高八石八斗六升五合

一、壹家

百姓

吉太夫

歳四拾壹

壹人

吉太夫子

三

同六ツ

牛壹匹

小家

吉太夫弟

九右衛門

同三拾八

壹人

九右衛門子

太郎

同四ツ

牛壹匹

小家

吉太夫弟

善四郎

同三拾五

耆人 同人親 忠左衛門 同七十六

高九石八合

一、老家 百姓 一郎右衛門 歳五拾貳

耆人 一郎右衛門子 五郎 同拾貳

耆人 同人子 六 同九ツ

耆人 同人子 八 同六ツ

牛耆匹

(中略)

高六石四斗貳升五合

一、老家 百姓 弥右衛門 歳四拾六

耆人 弥右衛門子 助三郎 同十九

耆人 同人子 石 同十貳

耆人 同人子 権 同貳ツ

高八石三斗三升壹合

小家 弥右衛門おひ 九郎二郎 同貳十

耆人 九郎二郎弟 又 同拾七

(B) 延宝元年夫役改帳

一、貳分役 吉太夫

近世淡路の棒役負担について(高橋)

同 九右衛門

同 善四郎

一、貳分役 市郎右衛門

(中略)

一、貳分役 弥右衛門

同 助三郎

同 九郎二郎

同 また

小家にも石高記載がされているなどの相違はあるが、先に阿波で施行された明暦棟付改めの編成に準拠していることは明らかである。棟付帳では本家筋を中心とする同族团的グループが惣家——小家関係で把握され、また村内の全ての男子が登録されるなど寛永期と比べると人身的把握がより強くなり、村落支配のための戸籍的要素が濃くなっている点特徴的である。夫役改帳を見れば、ここでも①一五才〜六〇才までの者が夫負人として各一歩役を負担し、阿波なみに従来の棟別負担から頭役に変化していること、②頭役としての棒役は惣家——小家単位に一括して把握されていることなどが確認される。淡路では、この延宝棟付改めで算定された棒役数が各村の「古夫」として、後の記録にも「棒役とは棟附御改の二分役人五人を棒一本と定めて、延宝元年御改の棒数今に用ひ来りて、諸役の割此棒数にかける也」と記されているように、<sup>(30)</sup>以後の棒役負担の基準となった。

ところで、延宝八年(一六八〇)、淡路では三原・津名両郡の組頭庄屋に対して、棒役以下の諸役負担に関する「覚」五か条が郡奉行から出されている。<sup>(31)</sup>先の延宝棟付改めにもとづく諸役負担体系の整備を図ったものである。そ

の詳細については省くが、そこでは「惣而御棟付相極村中百姓役高後々増減雖有之、無其指引、相定員数之通何分村中為惣百姓可相勤」と最終的には村請けによる諸役負担の原則が確認されている。また、その末尾には、「…此条々於村々毎年之春庄屋五人組小百姓寄合、寂前御棟付之節、庄屋指上村中人付帳面之跡書を以無依怙偏頗令相談、其年中之棒役・小役・夫銀・見掛銀・船役・加子役等割符可相定之旨、村々至小百姓一々申聞堅可相守之由、組下庄屋中へ可申渡者也」とあり、その算用・割賦にあたっては村中一同が立ち合い「村中人付帳面」を基準にした公正な運営が指示されていることも注目される。同じ時期に同内容の通達が阿波においても出されており、延宝期に徳島藩の村請制にもとづく夫役体系が整備・確定されたと見ることができると、当時村方が負担した諸役としては、棒役・小役・夫銀・見懸銀があった。その場合、棒役以下の諸役を村方のだれがどう負担したかにについては、時代は下がるが、宝暦一二年（一七六二）に津名郡内田村から出された次のような文書がある。<sup>32</sup>

御尋ニ付申上之覚

一、郷中百姓共、先年棟附之節御極メ被遊候式歩役付之儀ハ如何様成者を式歩役と相立候哉、夫銀付之者ハ同百姓ながらいか様之子細ニ而夫銀付ニ相成候哉、猶又見掛銀付之百姓もいか成義ニ而見掛銀付ニ候哉、右次第之趣村々有姿申上候様ニと被為仰付奉畏候

一、式歩役之義、先年棟付御改之節根元方之百姓筋目之者、本株田畠所持仕居申類族之者共を式歩役ニ御立被遊候哉之様ニ村々内有姿ニ相当相見申候事

一、夫銀之儀、無家督ニ而式歩役難相勤者并片扶持奉公人隠居人小家等之分、夫銀五匁宛被召上、式歩役を御免被仰付之様ニ奉存候御事

一、見懸銀之義ハ、先年棟付御改之節、諸職人商人等ニ其時節之身上ニ応シ被召上候物哉と奉存候御事

## (下略)

これによれば、村方ではそれまでの慣行として、①「式歩役」②「樺役は「根元方之百姓筋目之者」「本株田畠所持仕居申類族」③旧来の役家層およびその一族が負担し、④夫銀は樺役を免除された非役家層⑤無家督人・隠居および片扶持奉公人などが銀五匁ずつを負担、そして⑥見懸銀は百姓以外の諸職人・商人などが「身上ニ応シ」て応分に上納していたことがわかる。役家と非役家を基準にして夫役負担体系が組み立てられているわけであるが、非役家が本来の夫役に代わって夫米（銀）を負担することは、他藩においても確認される場所である。<sup>34)</sup>

延宝四年（一六七六）の記録によれば、<sup>35)</sup>淡路分の樺役は二、二〇九人四歩を数え、それ以外の夫銀・見懸銀・舟役銀は合計二八貫九〇二匁が藩庫に納入されており、以後多少の増減はあるが、ほぼこの額が「元高」として夫役賦課の基準となった。先述したように、阿波では寛文期を画期として二歩役負担が現夫制から代銀納に移行したが、淡路ではまだこの段階では現夫負担を原則としていた。当時の樺役について検討することは史料的にむづかしいが、天保期ごろと推定される記録では、「樺役にて勤める事第一に井普請、組定例普請を地普請といふて此分は其村切りに仕立て、新池、新溝等今の日雇普請の類、右樺役かかり、御国役を以て仕立しことなり、其外御城・諸御役所詰・伝役・郷役の類皆樺役にして勤し所也」と説明している。<sup>36)</sup>ところで、こうした淡路の樺役が、洲本府の判断によって阿波なみに代銀納⑦請樺（銀）制に切り替えられたのは、宝永年間のことであった。

## 四、

宝永八年（一七一二）、淡路では「両郡夫役遣、向後御指止被遊、郷中夫役売買並ニ樺役売本ニ付、米菰石ニ御極被遊、此銀六拾目宛ニ被召上諸御用之役遣日用ニ而可被仰付候」と、現夫による樺役負担から請樺（銀）制へと制

度的改編が行なわれた。<sup>37)</sup> この通達によって、今後、①棒役一本＝米一石＝銀六十匁（棒役頭一人＝銀一二匁）の割合で代銀納とすること、②それにともなつて、従来棒役でまかなつてきた諸御用は原則として「日用」で処理することなどが確認されている。前掲記録では、その間の事情を「元禄・宝永の比、凶年うち続き村々百姓多く他国稼に罷出、相残る人数すくなく、右棒役勤がたきに依て願上、棒一本米一石宛の受米に相成り、右米代銀六十匁に御定被仰付」と棒役の過重負担——農民の貧窮化が要因であつたと説明しているが、<sup>38)</sup> 現夫制から代銀納への移行措置の背景には、そうした村方からの強い要求が存在していた。また当時、棒役の運用に際して現実には「郷中夫役売買」<sup>39)</sup> がかなり一般的に行なわれていたようであるが、棒役そのものが一種の持株化してしまい売買の対象となつていたこと、さらに一部の棒役御用が特定の人物の請け負いによつて処理されていたことなど、<sup>40)</sup> 棒役制度の変質・形骸化が進行していたことも、その要因として見過ごすことはできない。落としても、農民労働力を機能的に編成するには、請棒（棒）制への転換がより現実的・合理的な方向であつたにちがいない。

さて、請棒（銀）制の採用によつて、淡州仕置方では津名・三原両郡の組頭庄屋の「存寄」をふまえて、大略次のような諸役御用の現夫負担を免除している。<sup>41)</sup>

- 一、御郡方・井水方・御林方・御作事方・道ノ手方惣而夫役ニ懸り申役遣詰夫
- 一、安宅御用・須本波戸御用・大坂御屋敷御用其外諸御手崎御用之藁萱縄建菰等
- 一、新御蔵手伝役人・御会所人足・御城山松茸取役人
- 一、納豆御用之山椒木蕨繩之事

一、太守様江戸御上下之節由良沼嶋福良へ相詰申役人詰夫并海辺不時御用之役人詰夫薪糶子郡方・井水方をはじめ各役所手崎の諸御用人足ならびに諸懸物など、その対象は多岐にわたるが、以後、これらの

諸御用人足は原則として日用賃銀で運用されることになり、また、御用藁縄などの懸物は、あらたに高掛かりで各村に割賦され代銀支給で調達されることになった。ちなみに、宝永八年に割本の手元で算定された両郡の請棒を示せば、次のとおりである。<sup>42)</sup>

一、夫役二九四本一步 津名・三原両郡本棒

内 六五〇本九歩 村々五人組行キ林下見并道筋町送人夫その他引棒

残 一五五三本八歩 有株、此節御用相勤候

此請銀九三貫二二八匁(棒役一本〓銀六〇匁)

(a)四五貫九八四匁 井水方作事方林方諸役人詰夫、合計三万〇六五六八分の賃金(一人〓一匁五分宛)

(b)一八貫一七七匁 井水方蔵入分池普請人夫扶持方、藁縄萱等郷中調物代銀共

残 二九貫〇六七匁 残銀

本棒(棒役元数)から町送夫その他の引棒を除いた有棒は一五五三本余〓請銀九三貫余となり、ここから諸役日用人夫賃・懸物代銀など従来棒役で負担していた諸費用(a)(b)が支払われ、残銀二九貫余が棒役銀として藩庫に納入される計算となる。なお、ここでは(a)年間三万〇六五六八人の諸人夫・詰夫が算定されているが、その内訳は井水方が一万六四四五人(全体の約五四パーセント)を占めており、さらに(b)でも其の大半が「井水方御扶持方代銀」に支出されるなど、<sup>43)</sup>溜め池用水など勸農普請を中心とする井水方御用が大きな比重を占めているのが特徴的である。このことは阿波でも共通しており、一七世紀後半以降の夫役(銀)徴発がすぐれて生産基盤整備のための勸農普請役を軸に展開されたことを示している。

ところで、請棒(銀)制の採用にあたって意見を求められた際、両郡組頭庄屋たちは「向後役遣詰夫日用ニ被為仰

付候ハ、…・慥成者本請御極置被遊、賃銀相応ニ被為仰付、本請方役人詰夫肝煎申候ハ、御用御手支ハ御座有間敷様ニ奉存候」と「本請」（割本）を設置し、「本請」による運営を建言している。<sup>(44)</sup> 洲本仕置方ではこれを容れて、津名郡下物部村組頭庄屋の不動太郎左衛門を「両郡割本」に起用し、諸御用・諸懸物の割賦および日用裁判の任に当たらせた。割本の職掌事項は棒役銀・夫銀・見懸銀などの算用・取り立て、井水方・郡方その他諸役所御用「日用人夫詰夫」の割賦・賃銀請払いをはじめ「御上々様御通行之砌」の草履・草鞋の調達にいたるまできわめて多岐におよんだが、そのための諸造用として年間八石の蔵米が給与された。<sup>(45)</sup> 割本は、太郎左衛門自身が「郷中へ被為仰付諸割賦、聊之義ニ而も私方へ被為仰付候」と誇示するように、両郡の組村（組頭庄屋）―村（庄屋）を統括し「割本并日用仕イ裁判御用」の一手差配を容認された。<sup>(46)</sup> こうして、いわば割本の下に村請制システムを編成することによって、以後、請棒（銀）制は維持されたといえる。

こうして請棒（銀）制の成立により、夫役は棒役一人役Ⅱ六〇匁、夫銀Ⅱ五匁という統一基準で賦課されるようになり、井水普請などの諸御用も日用Ⅱ雇用労働に依存する度合いがより強くなってきた。また、村請けによって徴収された棒役銀以下の夫役銀もその内の一定額が藩庫に納入されるなど、その限りにおいては準貢租的な傾向をも強めていった。しかし、一方では請棒（銀）後も従来どおり、村々農民の現夫（棒役）徴発による諸御用は少なくなかった。その主なものとしては、①藩主の淡路巡国、参勤交代時の送夫・詰夫、②巡見使并公儀役人不時御用の際の送人馬・詰夫、③「海辺不時急御用」の際の役人・詰夫・薪・雑子、④郷中往還道・橋その他の繕役人、⑤諸手崎役人出郷の節、村方詰夫・薪・雑子、⑥宗門奉行送夫・詰夫・薪・雑子などがあったが、これらは「右之分ハ近年夫役請銀ニ成候而も…日用遣ニ成候而ハ御用相支申義有之故、其儘夫役ニ而相勤申」と、日用勤役でもってしては十分に補充しえない諸役であった。<sup>(47)</sup> このうち、①～③は「公儀御用」とでも称すべき諸役であり、国中割（国役）として両郡村

浦に賦課されたが、その際、送夫一人〓七合五勺（詰夫一人〓五合）の扶持方米、もしくは夫賃が支給された。また、④〓⑥は「小役」とも総称され、主に村方の生産・生活ならびに郷中支配に関わる賦課であり、扶持方米なしの棒役負担でまかなわれた。とくに、この場合、①〓③の国役が注目される。これらは、いずれも定役・臨時役をとわず、農民夫役が本来的に持っていた陣夫役の系列に属するものであり、農民サイドにおいても現夫負担すべき「国役」として認識されていた。③に関してみれば、文久二年（一八六二）、割元佐野助作は異国船接近の報を受けて、両郡組村に対して「急々申達候、然ハ此已後異国船渡来之節：撰人足頭七拾人：何時御配有之候共、即刻指出候様御郡代様方被仰付候条右様御承知、御配有次第其處ニ而夫役人加子人ニ不拘、撰人随分若者相揃指出方兼而御配置可被成候」と急達を廻している。<sup>(48)</sup>「異国船渡来」に備えての海岸警備のため、郡代から命令があり次第、「随分若者相揃」へ、事態に即応できる動員態勢がとれるよう指示したものである。このように、現夫、とりわけ陣夫役に関わる農民労働力の徴発体制は、棒請（銀）制下にあってもさまざまな形態で継承されており、かつ農民側もそれに対して自律的に対応しようとしている点は注目されよう。

さて、これまで棒役の制度的側面を中心にみてきたが、最後に個別村落において棒役が実際にどのように負担されたかを、寛政期の三原郡国衙村を素材にして検討しておこう。国衙村は、洲本と福良を結ぶ幹線・洲本街道沿いに位置し、隣接する立川瀬村など一ヶ村で上八木組を構成していた。参考のため、明治初年に作成された記録によって、上八木組の状況を表1に示しておく。表のように、淡路の棒役調査は延宝・文化棟付改めの二回だけ実施されており、したがって寛政期の棒役賦課は延宝棟付改めによって算定されたものが基準となっている。ここで、寛政六年（一七九四）に国衙村が負担した棒役銀関係を整理すれば、次のとおりである。<sup>(49)</sup>

棒役銀関係賦総額……………

一貫八五四匁三〇

(1) 棒役銀（棒数二六本分） 一貫六一六匁八〇

(a) 出棒（棒数一三本六歩） 八四〇匁〇〇

(b) 引棒（棒数一二本四歩） 七六六匁〇〇

払方

(a) 「棒役本割」分 一貫二九四匁〇〇

本割人、八八人（一人当り一五匁〇〇）

(b) 「棒役筋目式番割」分 三三二匁〇〇

二番割人、四八人（一人当り一匁一五匁六〇）

(2) 夫銀 五四匁五〇

払方 夫銀人一一人（一人当り四匁九六）

(3) 見懸銀 一五匁八〇：払方、紺屋二人（一人当り七匁九〇）

(4) 他村居付人与内銀 一六八匁

払方、居付人一八人（一人当り四匁一二匁）

このうち、①は棒役一本（一人役・夫負人五人） 銀六〇匁で算定された棒役銀高であり、二六本という棒数は先述したように延宝棟付改めの夫役数を元高としたものである。なお毎年、棒役二六本のうち一二本四分は、同村が洲本街道沿いに位置しているため公用の伝馬役Ⅱ「町送夫」の賃銀として差し引かれ（引棒）、残り一三本六分を棒役銀（出棒）として藩庫へ納入することが慣例化していた。ところで、この①の棒役銀が夫負百姓に割賦されるのであるが、そのうち、(a)が「棒役本割人」八八人に、残額(b)が「棒役筋目式番割人」四八人にそれぞれ賦課された。夫負

表1 上八木組高家数棒役その他一覧

村名	村高	家数	人数	延宝棒役	文化棒役
上八木	995.8	126	442	23.4	31.8
国衙	114.7	165	902	27.4	48.5
立川瀬	690.1	136	543	10.6	35.8
浦壁	431.7	99	461	3.4	12.6
新庄	188.5	60	260	2.2	15.4
馬廻	211.1	34	150	2.0	7.4
青木	135.8	47	188	—	11.0
立石	106.8	25	124	1.0	7.1
黒道	85.3	13	61	0.2	2.8
富田	11.3	32	171	0.2	7.4
草	107.7	99	608	—	—
合計	4078.8	836	3,910	70.4	179.8
	石	軒	人	人歩	人歩

注 蜂須賀家文書「淡路国三原郡反別戸数取調書」より作成

百姓には、棒役負担能力に応じて本割人とそれに準ずる二番割人との二本立てが村内措置として設定されていたことがわかる。<sup>80)</sup> ②③は、棒役を免除された村内の夫銀人および見懸人（百姓以外の諸職人など、この場合は紺屋）から徴収し、棒役銀同様に藩庫に納入された。④は他村からの「居付人」＝来住者に賦課されたものであり、この与内銀は村内の「道作り」その他の「公役」費に充当され、寛政六年には合計八十九人の「公役人」に対して一人当り一匁八八ずつの賃銀がここから支払われている。

さて、表2は寛政期の国衙村の棒役関係負担人数を整理したものであるが、これによると①②③④とも負担人数はほぼ固定しており、一人当りの負担額もなかに定額化していた。なお、①のうち「棒役本割人」と「二番割人」の割合が年によって変動しているが、全体としては一三〇人前後で一定しており、棒役負担が百姓株として固定化していた事情を窺うことができる。その場合、本割人と二番割人の一部が年によって入れ替わっているわけであるが、寛政七年についてみると前年度の二番割人四十八人のうち六匁一二匁と高額を負担していた者はすべて本割人に編入されていることが判明する。<sup>81)</sup> 本割人数を出来るだけ確保することによって、村内での棒役銀負担の均等化・軽減化を図ろうとしていたことが窺える。

ところで、淡路では延宝棒役が基準となつて、その後の棒役負担が算定されていた。したがって、棒役負担は負担額が固定化していたため「棒役

表2 三原郡国衙村棒役負担

	寛政4 (1792) 年	同6 (1794) 年	同7 (1795) 年	同9 (1797) 年
	匁	匁	匁	匁
①棒役本割人	94 (15.85)	83 (15.60)	113 (14.61)	114 (13.67)
同二番割人	38 (2~6)	48 (1~12)	13 (1~6)	16 (1~6)
(小計)	132	131	126	130
②夫銀人	12 ( 4.78)	11 ( 4.96)	10 ( 5.45)	10 ( 5.50)
③見懸人	2 ( 7.90)	2 ( 7.90)	2 ( 7.90)	2 ( 7.90)
④他村居付人	15 (6~10)	18 (4~12)	15 (4~10)	16 (5~10)
合 計	161人	162人	153人	158人

注 各年の「棒役夫銀割帳」(原口家文書)より作成、( )内は1人当り負担額を示す。

之義ハ正徳年中奉願、米菴石之御定直段銀六十目ニ相成五人相ニ菴人ニ<sup>(拾二頁カ)</sup>ニ定リ居申候：只今ニ而ハ人数も多ふへ居申儀ニ候へ共、相勤申棒役ハ格別ふへ申儀無御座候」とあるように、<sup>(5)</sup> 実際には現実の夫負人数の増加に対応するものではなかった。こうした事情を考慮すると、寛政期の国衙村で棒役関係を負担していたのは約一六〇人前後であるが(表2)、この数字が頭役としての実際の夫負人数を指していたとは考えられない。すでに、享保期の記録でも「唯今迄ハ請銀故菴人ニ付拾貳匁宛指上申候：然共子弟余多有之者共、右拾貳匁ニて子弟相済申候」と指摘されているように、<sup>(6)</sup> 棒役銀負担と実際の夫負人(二歩役Ⅱ一二匁)との間にギャップが生じており、一五歳〜六〇歳の夫負人すべてに賦課されたのではなく、むしろ夫負人数とは別に家を単位として棒役銀が賦課されていたのではないかと考えられる。寛政期の国衙村の夫負人一六〇人という数字も、その実態は家数Ⅱ経営数を示すものであったと推定される。その具体的な状況は関連史料が欠如しているため確かめることができないが、延宝棒役が固定化され、それが村請けで処理されていくなかで、頭役としての棒役銀が実質的には形骸化し夫負人数の多少とは無関係に個々の家に均等割りの形で賦課されるに至ったものと思われる。淡路で文化年間に実施された棟付改めは、そうした状況を止揚するため、村々の実態を把握したうえであらためて夫負人の二歩役負担を基準にして夫役体系を再構築しようとするものであった。

注

① 夫役に関する研究史を整理したものとしては、三鬼清一郎「人掃令をめぐる」(『名古屋大学日本史論集』下巻、一九七五年)がある。

② 例えば、『日本史研究』三三四号(一九八九年)では「近世の『役』と民衆」という特集を組み、役負担と民衆(農民)

との具体的な関わり様を抉りだし、夫役研究にも新たな論点を提起している。

③ 高橋啓「近世後期阿波における『諸割賦』をめぐる」(有元正雄編『近世瀬戸内農村の研究』淡水社、一九八八年)、なお、夫役については同『徳島藩における夫役制度をめぐる』(『史窓』三、四号、一九七二年、七三年)

- ④ 淡路の棒役に関する研究成果としては、新見貫次「淡路の棟付帳」（『地方史研究』七八号、一九六五年）、八木哲浩稿「幕藩制の成立」（『兵庫県史』第四卷、一九七九年、所収）、前田哲也「地方知行制の構造と展開」（一九八八年鳴門教育大学提出修士論文、なお、その一部は「鳴門史学」三号、一九八九年に収録）、武田清市「淡路往還町送り」（同「近世淡路史考」近代文芸社、一九八九年）などがある。
- ⑤ 「徳島県史料第一巻・阿波年表秘録」（以下「阿波年表秘録」と略記）四二頁、四四頁
- ⑥ 「阿波年表秘録」七七頁
- ⑦ 「阿波年表秘録」六五頁～六六頁、九一頁
- ⑧ 「阿波年表秘録」六七頁～六八頁、八八頁
- ⑨ 「盤磐草」（新見貫次前掲論文「淡路島の棟付帳」より引用）、なお、「夫仕調帳面」（新見貫次氏収集文書、現淡路文化史料館寄託）によると、夫役を棒役と称した由来について「棒役とも申習、五人を壹本と申候ハ持籠・持棒・持鎌・持提灯・持飯料持・此五人を壹本と相立、御軍役迄ニ組合之由申伝候得共記録ハ無御座候」と記している。伝承であるとしながらも、元来棒役が軍役の末端を構成するものとして「持籠」以下の五人役を一セットにして編成されたものだという指摘は近世の農民夫役が基本的には陣夫役を基幹として設定されたことを物語るものとして注目される。
- ⑩ 三原郡史編纂室保管史料（複写コピーによる）
- ⑪ 大伏家文書（徳島県板野郡藍住町）
- ⑫ 大島眞理夫「近世農民支配と家族・共同体」（『日本史研究』三〇八号 一九八八年）
- ⑬ 徳島藩では、給人知行地内の百姓から屈強な者を選び、陣夫役その他に動員する態勢をととのえた。こうして戦陣に召し出され、陣夫役その他を負担した農民をとくに奉公人と呼び、藩初以来奉公人役を勤めた「家筋久しき百姓」を後に先規奉公人と称した（『阿波藩民政史料』所収「将卒役令」）。
- ⑭ 高橋啓前掲論文「徳島藩における夫役制度をめぐって」、例えば、明暦三年（一六五七）には、国内の用水溜池普請に關して「役人之義ハ一在所より調不相叶時は其組中より調、又大分之節は郡中より調、其ニて不調義ハ国役ニて調可申事」という指示が出されている。さらに、従来、勸農普請への農民労働力の徵発は、基本的には「百姓共申次第」に処理されていたが、明暦三年には「自今以後は遂吟味、百姓共手ニ不及所は御普請被仰付候」と国役普請の方向が示されている（『藩法集三・徳島藩』創文社、一九六二年、二二三八号、二二四一号）
- ⑮ 蜂須賀家文書（国立史料館所蔵）「忠英様光隆様御直仕置之節御判物御書付」
- ⑯ 棟付帳では、村の住人は本家・分家関係を軸としたいくつかの小集団別に把握された。こうした同族団的な結合を阿波では「株内」とも称したが、当時のそれはけっして棟付帳の上

だけの関係ではなく、現実の彼らの生活や生産活動をも規定する生活共同体の単位としても実質的に機能していたと考えられる。

⑬大島眞理夫「近世における農民支配原則と『家族形態』」(大阪市立大学『経済学雑誌』八七の四、一九八六年)

⑭大伏家文書「延宝二年、板野郡東中富村百姓夫役帳」「寛文七年、板野郡東中富村人数家数改御帳」

⑮大伏家文書「寛文拾壹年、東中富分秋御年貢米割面附帳」「寛文七年、板野郡東中富村人数家数改御帳」

⑯蜂須賀家文書「寛永十一年、宝暦五年迄、御仕置御家老方御書附を以被仰渡候郡所記録」

⑰佐野家文書(淡路文化史料館寄託文書)

⑱高橋啓前掲論文「近世後期阿波における『諸割賦』をめぐる」

⑲大伏家文書「寛文二年、坂東郡東中富村夫役高指上ル御帳」

⑳蜂須賀家文書「寛文拾貳年、御国元へ之扣」

㉑「阿波年表秘録」一九一頁

㉒菊川家文書(淡路文化史料館寄託)「寛文十三年、淡州三原郡湊里村棟附人改之御帳」、同文書「延宝元年十二月、淡州三原郡湊里村夫役夫銀改帳」

㉓「盤磐草」(新見貫次前掲論文「淡路島の棟付帳」より引用)

㉔佐野家文書

㉕「藩法集三・徳島藩」二二八一号

㉖佐野家文書「御尋ニ付申上ル覚」

㉗安良城盛昭「幕藩体制社会の成立と構造」(御茶の水書房、一九五九年)九七頁

㉘蜂須賀家文書「御両国高物成并村付夫役諸運上其外上銀品々帳」

㉙広田直道「新秘録」(新見貫次前掲論文「淡路島の棟付帳」より引用)

㉚佐野家文書「両郡夫役遣向後御指止被遊ニ付存志申上ル覚」

㉛前掲広田直道「新秘録」

㉜棒役一本一石一銀六〇匁になった点についても、前出「夫仕調帳面」では「老本米一石と相極メ候ハ、竹木下見へ被遣棒一本下ニ而老石と売買、其節之相場六拾目ニ付右之通相願候由」とあり、村々の竹木下見役へ支給された棒役の売買値段に拠った旨が説明されている。

㉝請棒(銀)制の開始によって両郡の割本に任じられた津名郡下物部村組頭庄屋不動太郎左衛門は、当時、「新御蔵手伝役人・御会所人足・御城山松茸取役人」の請負人を勤めており、そこから「少宛徳用」も得ていたことが判明する(佐野家文書「乍恐申上ル口上之覚」)。なお、請棒(銀)制にともない御用人足などの大半は日用賃銀となるが、その際「賃銀被遣候品へ入札ニ而大形ハ請所方相動申候」(「夫仕調帳面」と実際には夫役請負制に移行していったと考えられるが、この点については後考を俟ちたい。

④前出「夫仕調帳面」、参考のため、この時請棒（銀）になつた諸御用・懸物を以下に同史料によって紹介しておく。

御郡方

一、志筑塩辛御用之延縄之事

一、御鷹參候節詰夫薪雜子之事

一、御檢地御檢見御奉行様渡海之刻福良須本ニ而詰夫薪雜子并須本徳嶋諸士御用ニ付往来之刻福良ニ而詰夫薪雜子之事

一、井普請其村有棒ニ而召仕不足之分ハ御國中棒役ニ割賦仕右御用詰夫ハ其所役ニ召使來候事

御林方

一、御林根伐枝落下莉等請所ニ申付目付指出候節詰夫薪雜子之事

一、村々御林極印相改之事

一、村々御留藪竹伐役又ハ垣繕役之事

一、在御奉公人長屋詰取夫并諸手崎定使番不時御用之刻詰夫薪雜子之事

御作事方

一、御通船之砌福良沼嶋由良三ヶ浦御繕御掃除詰夫薪雜子繩薬等之事

一、浦々御屋敷御番処村々御制札場惣而御國中堂社御繕御用之詰夫薪雜子繩葦等之事

一、浦々御船屋御繕御用之詰夫薪雜子屋根葺宣繩等之事

道之手方

一、道之手使番御鉄炮之者へ詰夫之事

一、川浚役人詰夫之事

安宅

一、御船御用之撰薬苦宣延縄下縄之事

一、御林ニ而馬目木其外御用木御伐らせ日出貨、船積手伝役詰夫薪雜子并浦々加子役之刻詰夫薪雜子之事

須本波戸

一、綱御用之撰薬并御用ニ付郷中ハ船大工相詰候節詰夫薪雜子之事

一、御船御用之苦宣之事

一、新御蔵手伝役人之事

一、会処水汲役人之事

江戸上下

一、福良沼嶋由良三ヶ浦福良ハ岩屋迄御馬詰夫薪雜子飼薬有

明油敷薬之事

右式拾ヶ条之分棒役ニ而召仕候得共請棒以後ハ日用賃銀遣又ハ御調ニ相成薬之義高ニ掛り申候

④② 佐野家文書「両郡夫役遣向後御指留被遊ニ付存志申上ル覚」

④③ 佐野家文書「覚」

④④ 佐野家文書「両郡割元被為仰付ニ付動方之趣申上ル覚」

④⑤ 佐野家文書「就御尋申上口上之覚」

④⑦ 前出「夫仕調帳面」

④8 佐野家文書「戌六月、佐野助作御用状」

④9 原口家文書（淡路文化史料館寄託文書） 「寛政六酉年、上

八木組国ヶ村棒割夫銀割帳」

⑤0 本割人と二番割人とがどのような基準で設定されたかは不明であるが、棒役負担の一つである「町送人」に関して津名郡下物部村の記録に「町送人共：田地三反以上所持仕本株と相立候者貳拾貳人、又宅反貳式反迄所持仕候半株之者四人御座候」（佐野家文書「乍恐奉願上御訴訟之事」）とあり、土地保有の状況によって本株と半株の区別があったことがわかる。おそらく、この場合も土地保有状況を基準にして設定されたものと考えられる。なお、夫銀人についても村によっては「夫銀之義ハ宅人五匁宛ニ而至而小家之者ハ貳人三人宛ハ御座候旨ニ候」（佐野家文書）とその負担能力に応じた処置がとられていたようである。

⑤1 原口家文書「寛政七年、国ヶ村棒役夫銀割帳」

⑤2 佐野家文書・広田五之進書状

⑤3 佐野家文書「乍恐申上ル口上之覚」

付記、小稿を草するにあたり、淡路での史料閲覧に際しては、淡路文化史料館の田村昭治館長をはじめ館員の皆様、とくに武田清市調査員の格別のご配慮とご教示をえた。また、犬伏家文書を閲覧できたのは、ひとえに鳴門市の辻保夫氏のご尽力によるものである。記して深甚の謝意を表したい。なお、